

# 顕彰会便り

No.15

平成10年(1998)12月1日  
 編集・発行  
 津田左右吉博士顕彰会  
 美濃加茂市島町2-5-27  
 TEL 0574 28-8551

栗田直躬先生(早稲田大学名誉教授)を偲ぶ

## 津田博士との美しき師弟愛

大澤 功

6月13日の朝刊を見て驚きました。12日午前5時50分、老衰のため東京都練馬区小竹町2の52の10の自宅で死去、95歳。葬儀・告別式は15日午後0時30分から東京都練馬区小竹町1の61の1の江古田斎場で、喪主は妻不二子(ふじこ)さん。『津田左右吉全集』を編集した。(朝日新聞朝刊)と栗田直躬先生の訃報がでていたからです。



平成10年6月15日、東京都江古田斎場 栗田直躬 早稲田大学名誉教授 お別れの会。 小山宙丸葬儀委員長の弔辞

早速、関係者に連絡を取り、佐合顕彰会長が都合が付かなかったので、私と事務局の一人が津田左右吉博士顕彰会を代表して葬儀に参列しました。

葬儀は生前の栗田先生のご意志によって、宗派によらず、簡素で、杜撰な、しかも盛大なお別れの会になりました。生花に包まれた先生の遺影に、喪主、ご家族、ご親族をはじめ小山宙丸葬儀委員長(前早稲田大学総長)、門弟、知人、栗田先生の教え子、岩波書店はじめ出版社、学術関係者等が参列し、ペーパークレーン135番四重奏曲(これは津田先生のお好みの曲で、常々栗田先生と共に鑑賞された曲)が、静かに斎場を流れる中を、参列者一同が献花されて別れを惜しみました。

斎場には、喪主、施主、葬儀委員長、早稲田大学、千葉商科大学、岩波書店、津田左右吉博士顕彰



会をはじめ各種団体、知人などからの供花が整然と飾られていました。式は先ず生前の先生のご功績がたたえられ、午後0時30分から小山葬

儀委員長が、

「栗田先生は九十歳を超えられても研究者書『中国思想における自然と人間』を出版されました。津田博士に師事、傾倒されてその学問、研究を継承発展させました。私は昭和23年から50年間にわたって指導を受けました。古武士の風格を備えられ、東洋哲学学会長、東洋哲学研究室代表をされて、逝去直前まで執筆をされ、朱筆を入れられた原稿が机上に残されていたほど、最後まで中国思想の研究をされて、生涯初志を貫かれた学者でした」

と述べられ、福井文政早稲田大学教授(教授は津田博士の高弟福井

康順博士のご長男)は、

「栗田先生と戸川先生とは同期で、昭和24年に『中国上代史の研究』を出版され、その後近代的な中国思想の研究を続けられ、津田博士の著書の索引はいつも、栗田先生が作られ、『学術書には索引を』という恩師の主張を実行された。』と絶句。平川彰早稲田大学教授(文学博士、東京大学名誉教授、文学士院会員)は、

「本年3月お見舞い上がったときはお元気で、快方に向かつておられたのに…」

と哀悼のことは述べられ、小林正義早稲田大学教授は、門弟を代表して、

「この春、先生にお会いしたときは、東洋哲学学会の学生の様子を聞かれました。先生は学問と人間とは切り離せない、津田博士の『学問と人』の持論を取り上げられ、人間として豊かでない人は学問も向上しないと常々いわれました。世間の名利から遠ざかり、豊かな感性をお持ちで、『学問は人です』が口



早稲田大学「津田左右吉博士記念室」オープニングセレモニー。前小山宙丸早稲田大学総長、故栗田直躬早稲田大学名誉教授、中山初子さん、大澤 功顕彰会副会長



栗田 功 施主のあいさつ

病でした。一週間ほど前までお元気で北京大学百年記念式典の様子をお聞きになり、後進の行く末を気に掛けていました。先生からは35年の長きにわたって指導を受けた。…」と哀悼の情にたえない弔辞を述べられました。

弔辞が終わって夏島高泰氏他百数十通の弔電が披露され、津田顕彰会の弔電も読み上げられました。ついで献花に移り、小山宙丸葬儀委員長、喪主・栗田不二子さん、ご遺族(ご親族はじめ参列者一同、門弟多数の方々)が続きました。午後1時40分一同礼拝。小山委員長のおいさつ。午後2時出棺。これに先立って栗田功氏が会葬者へお礼を述べられ、先生の棺は斎場を埋めた会葬者の見送る中を火葬場に向かわれた。

栗田先生の「あの世にいつても、津田先生とともに」のお気持ち通り、津田先生ご夫婦のお墓(埼玉県新座市野火止、平林寺境内)のお隣で永遠の眠りにつかれました。

# 「歴史は未来をひらく」 歴史学者 津田左右吉

発行

著者／赤座憲久

児童文学者の赤座憲久氏が、津田左右吉博士の一生を伝記として書き下ろし、今年7月27日に美濃加茂市記者クラブで記者会見を行いました。

会見で赤座さんは、「子どもから大人まで読むことができる内容で、おばあちゃん子だった少年左右吉の生い立ちや学者としての生き方を時代背景を織り交ぜながら物語を書いた。真実を追究する姿は感動的で、広くみなさんに読んでもらえようようにした。」と執筆中の苦労話を交えながら語ってくれました。

本の内容は、おばあさん子だった少年時代、勉学に励む学生時代、中学校教師のころ、研究生活、裁判による受難の時代など、博士の一生が書かれています。

A5判、百三十四頁、千四百円。全国の書店で発売されています。



平成10年7月27日、美濃加茂市記者クラブ「歴史は未来をひらく 歴史学者津田左右吉」記者会見。左から、著者 赤座憲久氏、大澤 功 顕彰会副会長

## 津田家の墓 台風により破損

今年9月の台風7号は、各地の文化財や農産物に大きなツメ跡を残しました。美濃加茂市にある重要文化財旧太田臨本陣林家住宅、山之上町や蜂屋町の果樹園にも被害がありました。今回の台風は伊勢湾台風以来の勢力だと地元ではいわれています。東柳井の墓地にある津田家の墓所も台風の影響を受けました。津田博士の父藤馬の墓石をはじめ周辺の墓石は崩れ落ちていました。改めて自然の驚異を知る思いでした。津田顕彰会では、現地の状況を視察した結果、今後の課題として考えていくことになりました。



美濃加茂市下米田町東柳井津田家のお墓

## 下米田小学校 祖父母参観 津田左右吉伝「夢を追い続けて」・ほくの夢私の夢



平成10年10月15日  
美濃加茂市立下米田小学校  
祖父母参観  
ほくの夢、私の夢



演劇 津田左右吉伝  
「夢を追い続けて」▶

10月15日に美濃加茂市立下米田小学校で「祖父母参観」が行われました。祖父母からおおよそ百数十名が見守る中で、日頃の学習成果を発表しました。

6年2組の児童は「夢を追い続けて」という津田博士をテーマにした劇を上演しました。

ひとり一人が役割を持って劇を成功させようというがんばっていました。

また、「ほくの夢、私の夢」をテーマにして津田左右吉賞の校内審査で選ばれた四名が作文を披露しました。自分の将来の夢を発表すると会場から大きな拍手が送られました。

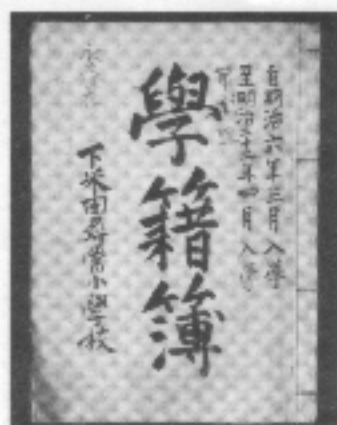
# 文明義校の先生たち

その二

## 神谷尚樹

「文明義校」に関する資料は、殆ど残っていないようです。私が見たのは、僅かに「岐阜縣美濃國加茂郡則光村立文明小学校生徒学籍簿」ぐらいです。当然、当時の先生についても資料はありません。

そこで、津田左右吉氏の「子どもの時のおもひで」（以下「自叙伝」とする）の記述から、当時の先生たちを考えてみます。



下米田小学校所蔵

「自叙伝」には4人の先生が登場しますが、「文明義校」創立の時の先生については記述がありません。学校は「寺子屋」の続きのようなものと述べていますから、4人の先生とは別に「寺子屋の先生」がいたのかどうか、よくわかりません。

①「訓導」の中の4人の先生は「訓導」の「モリ先生」（森達氏）

②ナゴヤの旧藩士の「助教」（明記していないが野田有尚のこと）

③「助教」である父（津田藤馬氏）

④「モリ先生」の前にいた「訓導」（左右吉氏の入学する前の先生で姓名は失念した）

以上です。この4人のうち④の姓名不詳の「訓導」を除いた3人が、明治12年1月の左右吉氏の入学当時の先生でした。

さて、「文明義校」の「入学者名簿」を見ると、その第一号の入学者の日付は明治6年3月23日です。ここで、各年の入学者数を拾ってみます。（当時の入学日はバラバラで年齢もマチマチです）

明治6年 2名  
明治7年 2名  
明治8年 2名  
明治9年 4名  
明治10年 5名  
明治11年 21名  
明治12年 21名  
明治13年 21名

（4月に津田藤馬氏が「教員養成所」へ行く）

明治9年 4名

（この頃、姓名不詳の「訓導」が来任か？）

明治10年 5名

（7月に野田有尚の次男（鎌次郎）が入学）

明治11年 21名

明治12年 21名

（1月に左右吉氏が入学）



米田富士と飛騨川河畔

確かに、創立して間もない頃の「文明義校」は、生徒も少なく、本当に「寺子屋」のようです。「自叙伝」によれば、創立当初は「寺子屋の先生」で間に合った授業も、その後、急速に教科の整備が進み、本格的な「授受法」を習得した「訓導」の配置が求められました。

しかし、その後、おそらく明治11年頃からの生徒急増の対策として、藤馬氏も「助教」として学校を手伝うことになりました。

（明治10年7月の鎌次郎の入学時には、本人を含めて13人の生徒がいたが、明治12年1月の左右吉氏の入学時には37名となっている）

藤馬氏が「助教」になってから、姓名不詳の「訓導」が離任し、かわりに「訓導」の「モリ先生」が来任し、この後に左右吉氏が入学しました。

こうして、「自叙伝」の中の先生に関する記述を整理してみると、「文明義校」の創立から、姓名不詳の「訓導」が来任するまでの数年間の先生は不明です。又、野田有尚が先生になった時期や理由を示唆する記述も見あたりません。確実な記述は、明治12年1月の左右吉氏の入学時に「助教」をしていたということだけです。

それにしても、野田有尚はどうして「文明義校」の先生になったのでしょうか。野田有尚が就職のあてもなく勝手に来村するの



野田有尚氏 妻 ます

は不自然ですので、やはり「先生」として招かれたと考えられます。わざわざ名古屋から40歳後半にもなって学校へ来たので、近所で若く「教員養成所」の経験のある藤馬氏の場合とは違う時期と状況であったと思われれます。

実は、私の父は「野田有尚は川辺の小学校の初代校長だった」と言っています。しかし、父から一度も「文明義校」とか「津田博士」の名を聞かされてはいません。ですから、私はせっせと川辺町の小学校に尋ねてみました。当然、心当たりはありません。こんな具合で、私は父の伝承を世間によくある身置屋（みびいき）な自慢話に過ぎないと思ひ、本気にしませんでした。

しかし、こうして「自叙伝」に記述されている4人の先生達が各々「文明義校」に携わった経緯や時期を推測するうちに、不明である創立当初の「寺子屋の先生」とは、実は、野田有尚であったのではないかと思えてきます。また、最近になって、十年ほど前に岐阜市での古書の即売会で、野田有尚の作った教材を見かけたとの元教員の話(伝聞で確認は出来ない)を聞いたから尚更です。

①「文明義校」の創立の頃、招かれて野田有尚が先生となつた。

②「寺子屋の先生」で間に合った学校も、その後、教科の整備が進み、「訓導」の配置が求められた。

③そこで、ヨナダの村々では、既に、47歳にもなる「寺子屋の先生」然とした野田有尚ではなく、近在の31歳の津田藤馬氏に「訓導」の資格を取るように要請した。

④藤馬氏は、明治8年4月から「教育養成所」へ行くが、途中でやめてしまう。

⑤仕方なく、ヨナダの村々は明治9年頃に、他所から姓名不詳の「訓導」を招いた。この時点で、野田有尚は時代遅れの先生となり、その呼称も、「訓



津田藤馬氏 妻 勢以

時点では名古屋にいた筈だと書きました。しかし、有尚が、家族を名古屋に残したまま、先に単身で福島村へ来たとすれば、辻褄(つじつま)が合います。とすれば、その後には家族を呼び寄せたのでしよう。

⑥明治10年7月に野田鑛次郎が入学した。

⑦明治11年の生徒急増を迎えて先生の増員が必要となり、藤馬氏が3人目の先生(助教)となる。

⑧藤馬氏が「助教」となったあと、姓名不詳の「訓導」が離任し、新たに「訓導」の「モリ先生」が来任した。

⑨明治12年1月に、左右吉氏が入学した。以上です。

かりに「文明義校」創立の頃の「寺子屋の先生」が野田有尚であったとすれば、有尚は明治6年2月には福島村へ来ていたことになり、私は、前号の「顕彰会たより」に、有尚は三男の幾三郎が明治6年5月に名古屋で生まれているから、その

「文明義校」の4人の先生について推測するうち、創立の頃の「寺子屋の先生」に行きついてしまいました。詮ずるところ、私も身置質なのかも知れません。未見の資料があれば是非御教示願います。

明治10年7月の野田鑛次郎の入学時に記入された有尚の住所は「福島村三番地」です。他の生徒にも「福島村三番地」が散見されますので、この時代の福島村の住所表記は大雑把なようです。

野田有尚は本籍を名古屋に残したまま、明治32年(一八九九)7月に、福島村で死去しました。72歳の生涯でした。その四ヶ月後、かつての同僚である津田藤馬氏も東橋井村にて逝去されたそうです。

野田有尚の死亡した場所は、「上米田村大字福島二百八十番地ノ一」となっています。前述の「福島村三番地」との詳しい関係は判りません。

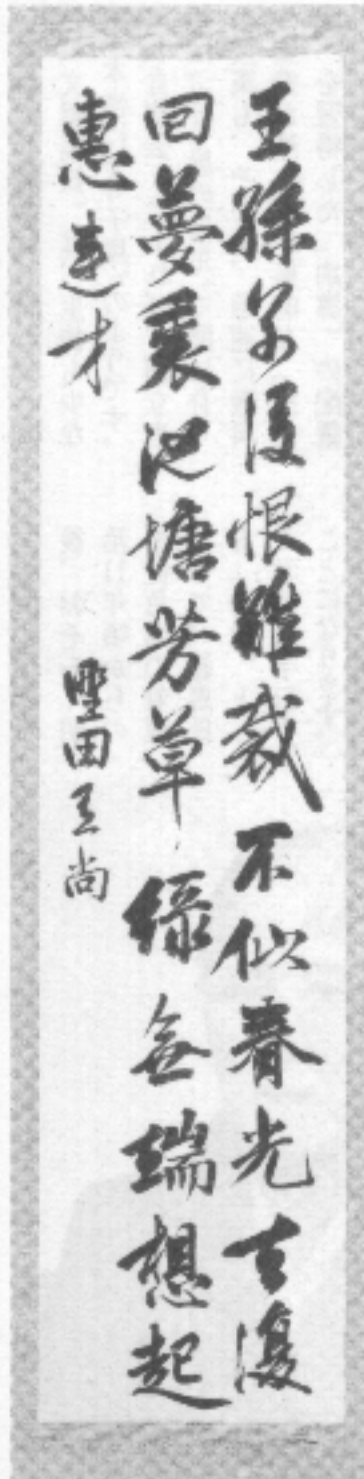
今、その場所を訪ねますと、昔は細かったという道路が、その後何度か拡幅されて立派な道路になっていきます。聞けば、野田の居住跡は大半が道路になってしまった由。その道路の北側(米田富士側)に隣接した場所に、ポツンと「文明義校跡」の標識が、朽ちた墓標のように立っています。また、道路南側には、その当時の野田の居宅に植えられていた庭木が数本、運良く切り倒されずにそのまま未だ生命を保っています。

いつの頃からか、野田有尚は「文明義校」の隣に生活していたようです。そして、そこで生涯を終えました。彼の墓は、飛騨川のダム湖に架かる「山川橋」のもとに、今もあります。妻も、昭和4年に同地に長逝し、有尚の隣に眠っています。本当に勝手なことを書いてしまいましたが、この辺りでやめます。

顕彰会のみなさんに出逢えて、積年の疑問が氷解した想いです。しかし、また別の疑問も生まれてきました。

津田左右吉博士という偉人の放つ光に、すでに忘れ去られた当時の周辺の人々がぼんやりと照らし出されたようです。お陰様で、因らずも私の曾祖父や大叔父たちがしのばれて、本当にありがたく思いました。

来年は、野田有尚や津田藤馬氏の没後百年にあたります。



野田有尚 書

# 第14回津田左右吉賞授賞式と記念講演

津田左右吉博士の顕彰を広く伝えるためにもうけられた津田左右吉賞。今年、「ゆめ」をテーマとして募集し、岐阜県内の小中学校から、応募総数七二八点の作品が集まりました。自分の夢に対して自信を持った子供達の作品が多く集まりました。二十一世紀をにう子どもたちの夢が叶うよう顕彰会としても応援していきたいと思えます。



講師 赤座憲久氏

また、「歴史は未来をひらく歴史学者 津田左右吉」の著者赤座憲久氏（児童文学者）が、記念講演を行いました。講演会では、津田賞の感想や著書にまつわる左記のようなエピソードをお話下さいました。

津田先生の伝記を書く上で一番興味を持ったことは、おぼあさん子であった左右吉少年と自分の環境が同じだったことです。私は津田先生の生い立ちを調べていくうちに、次のような先生のすばらしさを感じました。

文化勲章の授賞式するとき、平服で出席されたそうです。自分の流の生き方のできる人だと思いました。

また、幼いときからきちんとした学問を学ばれ、自分の考え方・見方を持っていられた人だと感じました。

一つのことを成し遂げるのに、一つずつ積み上げていく、そんな生涯を送っていたのです。

津田先生は「見果てぬ夢」とうたっておられたけれども、見ることのできない夢でも叶えていこうとする津田先生の生き方を私は学んでいこうと思えます。

とお話下さいました。受講者は赤座先生の話を興味深く聞き、うなずいたり、時には白い歯を見せたりしながら有意義な時間を過ごしました。



1998年10月31日 美濃加茂市中央公民館 津田左右吉賞授賞式

## 第14回津田左右吉賞 入賞者

### 小学校の部

#### 最優秀賞

太田小 6年 渡辺 晴子

#### 優秀賞

三和小 6年 朝日 和博  
山之上小 6年 山田 光宏

#### 佳作

古井小 5年 飯田 秀人  
下米田小 6年 伊藤 克昌  
桜ヶ丘小 6年 岡本 力  
伊深小 5年 亀井 健一  
蜂屋小 6年 川合 佐季  
岩野田小 6年 河合 珠実  
加茂野小 6年 福地 潤美

### 中学生の部

#### 最優秀賞

西可児中 2年 川崎ひと美

#### 優秀賞

加納中 3年 小栗 瑛子  
東可児中 3年 梶田久美子

#### 佳作

西可児中 2年 赤川 睦美  
双葉中 2年 足立 浩  
東可児中 2年 石川 亜美  
西可児中 3年 小野木 絵美  
泉中 3年 黒豆 智也  
西可児中 2年 駒田 綾乃  
東可児中 1年 長谷川 朋子



津田左右吉生家 昭和35年5月

す。して、き決し、会、は、定、築、で、す。移  
す。して、き決し、会、は、定、築、で、す。移  
す。して、き決し、会、は、定、築、で、す。移

美濃加茂市は、美濃加茂市名誉市民第1号の津田博士の生家を移築復原するため、12月補正予算で解体移築費を計上しました。生家は、明治初期の建造物で木造平屋建て、約43坪の大きさです。今後は、当時の建物の状況を調査しながら解体、別の場所へ復原する予定です。築先は未定で、市は当顕彰会と相談しながら決めていきます。

## 津田左右吉生家保存

美濃加茂市文化財調査集録第3集の発刊

### 津田左右吉博士の生家の調査が行われる

美濃加茂市教育委員会から津田左右吉博士の生家を含む、調査集録が発刊されました。名古屋市立大学溝口正人助教授らが生家の調査を行い、現在の建物から建築当初の状況を考察しました。

調査書には、建物の変遷、構造、現在の平面図と建築当時の平面図などが報告されています。調査書は、美濃加茂市教育委員会文化課で1冊500円で販売されています。

## 『歴史は未来をひらく 歴史学者 津田左右吉』

の斡旋販売

顕彰会では、赤座憲久氏の著作本を斡旋販売しております。

対象は、顕彰会会員です。本書に興味のある方は事務局までご連絡下さい。

問い合わせ先

〒505-0025

岐阜県美濃加茂市島町2-5-27

TEL (0574) 28-8551

津田左右吉博士顕彰会事務局まで



「歴史は未来をひらく 歴史学者 津田左右吉」

### 資料紹介

早稲田大学にある津田左右吉博士記念室は、津田博士の日記、蔵書、

遺品などが展示され、小研究会や会議が行われる場所になっています。この記念室について、津田博士の研究者である今井修氏が「早稲田大学史紀要」に「津田左右吉博士記念室と展示室資料について」で津田記念室の紹介をされています。記念室における展示や活用事例を報告したものです。

### 早稲田大学津八二記念博物館

5月15日開館

会津八一記念博物館は、大学内外の研究・教育に活用する目的で造られたものです。旧図書館を改装したもので、1階には企画展示室があり、2階には常設展示室があります。多くの貴重な資料が展示公開されていますが、展示品は、会津博士自身の書や蒐集した東洋美術の品々、博物館が所有する日本近代美術作品、アイヌ資料、考古資料など早稲田大学の学術研究の資料です。また、この建物の一部に津田左右吉博士記念館もあります。

津田博士と会津博士には親交があり、書簡のやりとりや著書の献本も行われていました。会津博士書き込みの本が、美濃加茂市立下米田小学校の「津田文庫」に保管されています。

